

研究ノート

## 教育における貧困の当事者性に関する原理的考察

—貧困を語るあなたは何者なのか?—

### A Consideration on the Principle of Autonomy Concerning the Poverty in Education

—Who is the "Party" in Poverty Issues?—

秋山 茂幸

Shigeyuki AKIYAMA

Key words: 臨床教育学、教師の貧困、教職の非正規化、サバルタン化する支援者、自分自身からの排除

#### 1. はじめに

小論では筆者が担当している「教育学概論」に参加してくれた学生の意見を手掛かりとしながら教育における貧困の当事者性に関して若干の考察を展開したい<sup>1</sup>。本稿では、子どもであれ、教師であれ、研究者であれ、「貧困を語っている当の本人は何者なのか」という点に着目する。近年、教育に関連する貧困問題については、社会科学的、政策的な分析や提言が数多く提出されているが、それらは客観的・三人称的な一般論の議論である。それに対して小論では、一人称もしくは二人称の視角、すなわち実存的・臨床的な観点に光を当て、「貧困の臨床教育学・教育人間学」のような議論を些少なりとも展開できればと考えている。特にここでは、貧困を語る「この私」という実存の問題をこそ俎上に載せてみたい<sup>2</sup>。

#### 2. 「子ども一般」の崩壊

現在、教育に関する事柄について何であれ語ろうとしたときに、格差や子どもの貧困の問題を視野から外すことはできない。このことは、子どもや学校に関する平均値的な一般論が語り難くなっていることを意味している。すなわち、学習指導の問題はもちろんのこと、生徒指導レベルの問題まで含めて、すべての教育の領域において、一般論を拒否するような格差の断絶が存在する。

例えば、学力の問題では、ある人々は、今後のグロー

バル化する社会で生き残るための人材育成という視点から、英語の早期教育の重要性はもとより、企業でイノベーションをもたらすような創造性や発想力を学校教育で養うべきことを強調する。2020年度以降から順次スタートする新しい学習指導要領やセンター試験に代わる新しい共通テストには、多分にそのような視点がある。しかし、こういった議論には、貧困家庭で親に放置され学ぶ習慣も身につけられず中学生で掛け算九九すらできないような子どものことは、あまり念頭に置かれていない。そこまで極端な話はしないにしても、教育改革にかかわる教育の専門家や経済界の人々が教育について議論するときを描いている子ども像は、ごく一握りのエリート層である事が多い<sup>3</sup>。

そして、二つ目の例として、校則の問題。筆者が様々な大学で授業を担当していて感じるのは、親が富裕層で、いわゆる進学校出身の学生ほど、「自分の通った学校の校則は自由だったし、本来学校は子どもの自主性が尊重されるべきだ」と考える傾向が強く、逆に、荒れた教育困難校出身の学生は、「厳しい校則が存在しないと学校の秩序が成り立たない」と考えがちであるということだ。「今の時代、どのような校則が適切か」という質問は、その人が、底辺層の子どもが囲い込まれたような学校をイメージするのか、ブランド制服を着用させるような学校をイメージするのか、それによって随分と変わってくる。

さらには、体罰問題について。体罰を肯定する人々が、

否定派に対して、しばしば行方反論は、「体罰を否定し話し合いで何でも解決できると考えるあなたの議論は、呑気な理想論だ。あなたは本当に荒れた学校で教壇に立ったことがあるのか？」という言葉だったりする。

この両者は住む世界も違ければ見えている景色もまったく違う。出会うこともない。

ここでは、それぞれの意見の妥当性はいったん置くが、こういったわけで現在において教育の問題を語る時、あなたはそもそもどういった教育を受けてきたのか、そして教師であれば、あなたはどのような学校で教壇に立っているのか、という「私(一人称)」の問題が大きく、その見方を左右することになる。この点を省みることなく教育について議論するとき、それらは往々にしてすれ違いになることが多い。

広く見渡してみると、いわゆる戦後の高度成長期から一億総中流と言われた時代には、分厚い中間層が存在し、教育を語る者が誰であれ、「今の子どもはね……」といったような、子どもや学校の平均値的な一般論を語ることができた。しかし、子どもの貧困が大きな問題として浮上り階層の分化が進んでいる現在において、教育について何かを語る時、「そもそも語っているあなたは何者であるのか」が極めて先鋭に問われることになる。

### 3. 一人称の貧困と三人称の貧困

「なるほど今はそんなに厳しい格差社会なんですね。だったら、これから負け組にならないように頑張ります。ありがとうございます。」

子どもの貧困問題について、授業で取り上げると、必ずと言ってよいほど、このような感想を述べる学生がいる。授業では、現在の日本で子どもの7人に1人が相対的貧困に陥っていること、親の学歴が高いほど子どもの学力も高くなる傾向があること、親の収入の違いによって子どもの教育環境が大きく異なること、子ども期の貧困がその後の人生(雇用、生涯所得)にも大きな影響を及ぼすこと、それが世代を巡って連鎖する可能性が高くなっていること……など現在では市井の人々にも知れ渡った基礎的な知識を取り上げ、再生産や文化資本などといった概念も紹介しながら、格差や貧困について学び、議論し、考えてもらう。もちろんそれは、今後、教師にならんとする者には、そういった基本的な知識や、貧困家庭の子ども(他者)に対する想像力が必須だと考えるからである。

そういったなかで、授業後、冒頭のような感想に出会

うと私はいつも脱力してしまっていた。率直に言ってしまえば、「自分がこの競争社会の中で何とか生き残ることしか考えていないような学生は、教師という職業に向いていないのではないか」と考えていた。他方で、「そのような自分のみに関心が集中した発想を揺さぶり、他者への想像力を喚起するような授業ができていない自分にこそ問題があったのではないか」とも考えたが、現在では、それらとは少し異なる見方をしている。以下、この点を解きほぐしていきたい。

ところで、ある年の授業後には、このような話をしてくれる学生もいた。

「私も今回の授業で出てきたような貧困家庭で育ちました。母子家庭で生活保護を受給していましたし、奨学金に頼りながら大学に来ています。それで、かつては自分の環境が恵まれていないことを親や社会の責任にしていました。でも、そうやって言い訳ばかりしていると前に進めない。今は、何でも自分のやる気次第で未来は開けると考えています。」

もちろん、この言葉に対して教員として返す言葉はある。「あなたがそうだったとしても、誰もかも、あなたのように強くないかもしれない。子どもは、どのような家庭環境に生れ落ちるか選ぶことはできない。不利な状況に生まれた子どもにだけ他人より多くの努力を強いること自体が、不公平なことではないか。あなた自身が、10メートル走で10メートル後ろからスタートするというハンデを負っても頑張って他人を追い抜くことができたとして、ハンデを負っている人達すべてに『あなた達も私のように10メートル後ろからでも文句を言わずに頑張ればよい』と言えば済む問題なのか。やはりハンデは、可能な限り無くなるように社会が努力すべきではないのか」と。こういった言葉が私の頭に浮かんでくる。

これは、正論だとは思ふ。しかし、どこか決定的なところですれ違っている。届いていない。ここにある断絶は、三人称的・一般論的な正論の言葉と、他の誰でもない「この私」を内側から駆動する一人称的な言葉の断絶である。

「私は、この春から一人暮らしをはじめた。授業が終わり帰宅した後、何もすることなく時間だけが過ぎていき、バイトもしていないので、お金だけがなくなっていく。一刻も早くバイトを見つけないと生きていくことができない。お金に支配されている日本

で頑張って生きようと思う」

レポートに、このような率直な話を綴ってくれる学生がいる。端的に言ってしまえば、近年、多くの学生にとって貧困の問題は、まず何より当事者的な問題として目の前にある。教育社会学者の大内裕和などが、繰り返し指摘していることだが、近年の学生はブラック・バイトや奨学金の返済問題で現在そして将来への不安や困難を抱えて日々生活している者が多い〔大内 2016, 2017〕。

貧困という問題の外側に立ちながら、貧困の内側の他者へと想像力を働かせながら語るということと、貧困という現実がすでに自分自身の問題として立ち現れており、その渦中にいる者が貧困について語るということ、この両者の語りはそれを規定する前提のコンテキスト自体が決定的に異なっている。

#### 4. リベラルの欺瞞

「でも、この文章を書いている大学の先生も、学歴社会の成功者ですよ」

近年、学歴フィルターなる言葉が就職活動をする学生の間などで話題となっているが、授業で日本の学歴社会について批判的な論調の研究者の意見を紹介したりすると、決まって上のような指摘をする学生がいる。私などは、研究なるものは「客観的なもの」であって、ある事柄について誰が発言しようと、それが事実である限り妥当すべきものは普遍的に妥当するのである、という考え方から簡単には抜け出せない。しかし、一部の学生は、それを誰が語っているのかということに敏感に感じ取る。一見、客観性を装った「えらい先生」の言葉は、ある種の安全地帯から発せられたものにすぎないのではないか、自己の立場や権益を脅かすような危険を負ってまで、真摯な態度でその言葉が発せられているのか、について鋭い問いかけが行われる<sup>5</sup>。

ここで、少し話は広がりすぎるかもしれないが、この問題と関連して、法哲学者の井上達夫が、アメリカ大統領選において平等を旗印とするリベラル側に欺瞞があったと指摘していたことに触れておきたい。少し長くなるが引用する。

「面白い本があって、「分析的マルクス主義」の代表的論客であるジェラルド・コーエンが『If You're an Egalitarian, How Come You're So Rich?』というタイトルの本を出しています。「あなたが平等主義ならば、どうしてそんなに金持ちなのか」(笑)。彼はイギリス人です

が、アメリカの平等主義的リベラルへの風刺が、このタイトルに込められています。コーエンは、平等主義的なリベラル派の代表たるロナルド・ドゥオーキンらを批判していますが、直接には理論的な批判で、彼らの経済的地位に触れてはいません。しかし、ドゥオーキンは、NYU(ニューヨーク大学)ロースクールにもものすごい高給で引き抜かれた。その後NYUのロースクールは、多くの有名・優秀な研究者を高給で引き抜き、たちまちランキングが二流から全米トップ5に跳ね上がった。しかし、そのコストは学生の授業料に転嫁される。今やNYUクラス一流ロースクールでは、卒業するまでの三年間で二十万ドルもかかる。学生のローン負担がどんどん上がっている。安いと言われた州立大学でも授業料は鰻上り。平等主義を訴えるリベラルな教授も高給を受け取り、そのしわ寄せが学生たちにいく。こうした欺瞞がリベラルの側にはあり、最初にちょっと言ったけれど、クリントンにしても同じような矛盾を抱えていると思いますね」〔井上達夫、渡辺靖 2016〕<sup>6</sup>。

貧困とその解決の道について語る我々は、自らを客観的で色のついていない透明な観察者として偽装しながら、この「欺瞞」に絡め取られてはいないだろうか<sup>7</sup>。大学教員の語る貧困問題は、問題の渦中にいる学生に、どの程度、届いているのだろうか。

ところで、ここで井上が指摘している問題は、高等教育に関することであるという点と、三人称的な問題を一人称へとつなぐ問題であるという点において、極めて教育学的な事柄である。教育人間学者の汐見稔幸が、次のような話を紹介している。「かつてドイツのある中学校教師が日本に勉強に来たとき、日本の中学校の環境問題を扱う授業をみてこう述べたことが思い出される。彼はこう言ったのである。『確かに日本の環境問題の授業の水準は高いと思う。教材もよく準備されている。でも、日本の中学生は、どうして、授業で環境問題を勉強したあと、道で空き缶を拾おうとするようにならないのか』と」〔汐見 2000: 64〕。そして、汐見は哲学者の戸坂潤による認識論を引きながら次のように述べている。「かんたんといえば、人間の認識はものごとを三人称的なレベルで、つまり一般論のレベルで認識するにとどまってはならない、そこから進んでそれらを『自己一身上の問題』として認識しなければほんとうに認識したことにならない。(中略)戦後、一橋大学の学長をつとめ、国民教育研究所の所長という仕事を担っていた上原専祿が、戸坂とは異なる角度からではあるが、日本の教育はすでに明らかにされた法則を理解することだけにこだわって、その法則と

子ども・青年の一人ひとりとの関係を自覚させることを怠ってきた、と批判したことも同じ問題意識に発しているように思う」[汐見 2000： 64f.]。

ここで、我々は次のように問わねばならない。教えられる（子どもの）側の自覚以前に、そもそも教える（大人の）側が、三人称的な一般論を『自己一身上の問題』として受け止めることができていたのか、と。

## 5. 教師の貧困

貧困に関して研究する側、教える側、支援する側の人間が、貧困の内部を生きる他者に対してどれだけ想像力を持っているのか、貧困を自己自身が関わっている問題として自覚しているかという問いかけは間違いなく重要であろう<sup>8</sup>。その点を確認した上で、すぐに付け加えなくてはならない。近年、研究する側、教える側、支援する側の人間の中にこそ、貧困の内部を生きざるを得ない人々が増加していることを。

教員の世界も非正規雇用（常勤講師と非常勤講師）が増えていることは、しばしば指摘されている。文部科学省によると、2017年度の全国の公立小中学校の常勤講師（臨時的教員）は前年度比1762人増の4万2792人。教員定数58万1423人の7.4%を占めている<sup>9</sup>。さらに、他のアルバイトなどと掛け持ちしながら特定教科の授業を担当する非常勤講師は5万人を超えて存在する。実数として、この10年程度で倍増している。

そして臨時的教員は、その立場が極めて不安定な状況に置かれている。雇用期間は、地方公務員法の規定によって事実上1年以内のため、各教委は年度末などに「解雇」し、再び採用する。毎年度、正規教員の配置を決めてから不足する人員を補うため、翌年度の雇用があるかどうかは、年度末まで分からないことが多い。原則1年で学校を異動し、保護者や子どもに対して、非正規であることを説明していない学校も多い。

こういった雇用形態の背景にあるのは、以下のような事実である。読売新聞の記事によれば、「教員の給与や採用などに関しては、2000年代に入って各教委の裁量が拡大しており、複数の教委は理由として、(1)子どもの減少に備えての雇用調整(2)人件費の節約——を挙げた。ある県教委の採用担当者は「正規採用すると後で解雇できない」と説明した」<sup>10</sup>。すなわち、臨時的教員も、一般の非正規雇用労働者と同じく、雇い止めが容易な雇用の調整弁として、コスト削減のために駒のように使われ、最終的に捨てられているのである。

このような状況において、教員は使命感や責任感を

もって教壇に立てるだろうか。不安とストレスを抱えながら教壇に立つ非正規の教員は、当初持っていたやる気や熱意を日々擦り減らしながら、教員としての自己肯定感が徐々に薄れていく毎日を送っている人も多いだろう。一度、非正規教員になると正規教員になりにくくなる「貧困における負のスパイラル」がここにも存在する。結果、立場や生活が安定せず将来の見通しが立たない不安が、子どもに伝わってしまう事があるかもしれない。ある非正規教員の女性は夫と死別し、二人の子どもを育てているが就学援助の対象になり次のように述べている。「教員として働いているのに、就学援助をもらう立場になる。自分の仕事が評価されていない感じです」<sup>11</sup>。

## 6. サバルタン化する支援者

くわえて、教員だけではなく、福祉分野の相談員や事務職など、多くの領域において全国の自治体で非正規公務員が急増している。2017年12月13日付の読売新聞の記事では、非正規で生活保護受給者の就労支援をしているシングルマザーの女性の以下のような声が紹介されている。「懸命に困窮者を支ながら自分の家族も養えないなんて。これ以上働き続けるのは無理」<sup>12</sup>。支援する者自身が支援を必要とする差し迫った状況にあるという現実が、そこかしこに現出している。そして、「自分を支援している人が実は支援を必要としている人である」という事実は、支援される者には見えない。このように、一見して「(子どもや困窮者の)支援者」の立場に立ちながらも、その実態は「要支援者」でもあり、そのことをなかなか公には語るできないという、いわば「サバルタン化した支援者」が現代には様々な領域で増加している<sup>13</sup>。

ところで、近年、教師の多忙問題を解消するために、教師が様々な分野の専門家と連携することが推奨されている。その専門家の種類は、スクール・カウンセラー、スクール・ソーシャルワーカー、スクール・ポリス、部活の外部指導員、事務業務のアシスタント、特別支援教育支援員、ICT支援員など、多岐にわたる。もちろん、現在、日本の教師は世界的にみても長時間労働にさらされ、過大な役割と負担がかけられていることは間違いなく、こういった教師の仕事のアウト・ソーシングには利点が多い。しかし、少し立ち止まって考えるべきなのは、これらの専門家の多くが非正規労働者でその就労環境が整っていないという点である。例えば、近年すすめられている部活の外部指導者の導入や、民間クラブの活用を称揚するのは容易いが、その労働環境には厳しいものが

ある。ライターの島沢優子は、以下のように述べている。「民間クラブの就労環境も決して整備されていません。学校の先生に無償ボランティアに近い形で負担させている部活とあまり変わらないかもしれません。たとえば、サッカークラブのコーチは年収 200 万～300 万円程度。もっと少ないかもしれない。最近では、30 代になり家庭を持つと生活できないので、コーチを辞める人も少なくないと聞きます」[内田、島沢 2017]。

チーム学校を謳いながら、そのチームの専門家メンバーの身分保障がなされていない。教師の負担を減らすための「善意の政策」として、このような分業や外注が進んでいるのは、実はこれらの政策が、雇用の調整が簡単であり人件費の削減にもなるという、コスト計算の論理と共振しているからである。この点に注意しなければならない。

このように、教員だけではなく、学校の教務スタッフ、非教務スタッフ、すべての領域において非正規雇用化がすすんでいる。これは、教育という営みを細く切り刻み断片化させ、教育の仕事全般をパートタイムジョブ化させることである。もしくは、教育が、あらゆる領域において縦割りになり、全人的な働きかけを放棄し、継続性を失い、短期的かつ近視眼的なものとなることを意味している<sup>14</sup>。そして、小論において何より強調しておきたいのは、教育に関わる者の多くが、身分保障がなされていない将来の不安の中でその仕事を行っているということの問題性である。

「貧困の不安に陥りながら教育・支援を何とか続ける者が、同時に支援を必要とする者でもある」という構図は、教育・支援する者に自己犠牲を強いることで初めて成り立つものであり、こういった歪みは早晚破綻する。その先にあるのは、自分より弱者の位置にいる者の抑圧と排除である<sup>15</sup>。

## 7. 貧困を当事者として語ることの困難性

さて、ここまで、教育を受ける側、教育をする側、研究する側など、教育の主体と客体の領域すべてに渡って、貧困の問題を当事者として生きる人間が増大している現状について見てきた。最後に、貧困の内側を生きる者と外側からの観察者との間に存在する、両者の語りを規定するコンテキストの相違についてあらためて考察したい。

まずは、哲学者の鷺田清一が、苦痛についてシモーヌ・ヴェイユを参照しながら述べている言葉を紹介しておこう。ヴェイユは、高等中学校の哲学教師であったが、炭鉱労働者の組合運動を支援し、失業者たちの手当てと同

額の生活をし、自分の給料の大半は職を持たぬ貧しい人々に与えていた。そして彼女は、人々の不幸や困難の中に身を浸そうとして工場労働者として働きます。「労働者は話はしないわ」。(不幸)と(困難)のなかにいるひとは話はしない。話をしないだけでなく、そもそも(不幸)もしくは(困難)のなかにじぶんがいるということそのことに無意識であろうとする。なじんでいこうとすらすらす。思考は痛みをもたらすからである。……思考するということが、ことばをもつことそのことはすでに一つの救い、あるいは恵まれた特権のうちにあるということなのだろう」[鷺田 1999: 160f.]。この思考がもたらす痛みと思考を放棄することを自ら望むような態度、そして最終的な言葉の喪失といった事態の背景には何があるのだろうか。

貧困なるものが他の誰でもない「この私」の問題として立ち現れるとき、その語りを強く規定し、三人称的な一般論の語りと隔絶を生む大きなファクターとして、ここでは自己責任論の内面化と、その帰結としての「自分自身からの排除」を挙げておきたい。社会活動家の湯浅誠は、その極めて有名な著書『反貧困』のなかで、貧困状態に至る背景には「五重の排除」があると述べ、以下の五つを挙げていた。すなわち、教育課程からの排除、企業福祉からの排除、家族福祉からの排除、公的福祉からの排除、そして最後に自分自身からの排除である[湯浅 2008][湯浅、仁平 2007]。

しばしば指摘されることではあるが、貧困に陥っている人間ほど自己責任論を内面化していると言われることがある。本来多くの人間は、ほどほどに勤勉で、ほどほどに怠慢だ。つまり、何か失敗したときに自己責任を問おうと思えば、誰しものが「もっと頑張ることができたのではないか」という余地を残している。したがって、自己の良心に照らせば照らすほど、自分の欠けた部分を探せば探すほど、自己責任の論理は否定し難くなってしまふ。

それに対して自己責任論を外から批判する善意の第三者は、努力できる環境をこそ問題にする。そして「やる気や意欲次第で、努力すればどうにでもなる」といったときの「やる気や意欲」こそが実は社会的に構築されたものであることを喝破する。すなわち、「自己の勤勉さ」は社会的な環境(他者)の中から調達される側面がある。そして「環境(他者)」からの働きかけと自己肯定感が正のスパイラルを構成するときに、互いが互いを生み出しつつ、人は「上手くいっている」軌道にのることができると。このとき、成功の個人内在的な要因と環境的な要因

は、コーヒーとミルクのように混ぜ合わさり、つねにすでに分離不能となるだろう。多くの近視眼的な人間は距離の遠い所に存在する環境要因は見えなくなり、「自分が上手くいっているのは自分の努力のおかげだ」と考えるようになる。逆に、負のスパイラルを形成するときも、失敗の個人内在的な要因と環境的な要因は混ぜ合わさり、近視眼的な当の本人は「自分が上手くいかないのは自分の怠慢のせいだ」と考えるようになるだろう。これによって自己肯定感は低下し続け、最終的には、自分の人生を自分で大切に思えなくなってしまうような「自分自身からの排除」へと行きつくことになる。

さて、ここからが問題なのだが、「自分自身から排除」された人間が、自分自身について語ることは極めて困難になる。自己の本質的な否定性について語るができる者は、すでにそれが過去化した人間か、現在の否定的な状況が未来には改善されうるとい希望の種を持つ者だけである。

人間には全ての人に弱さが存在し、その弱さを自己表出し認めあうことが社会の絆へと繋がるというような指摘をする人々がいる。しかし、しばしば指摘される逆説ではあるが、弱さを認めるためには強さが必要である。湯浅にならえば「溜め」(お金、頼れる家族・親族・友人、精神的なレベルの自信……などなど)が必要なのだ。溜めがある者だけが、素直に自らの弱さと向き合い、それを告白することができる。溜めのない社会的弱者は、自らを偽り、弱さを自分自身の中で不可視化し、虚勢であったとしても自らの強い部分を主張しなければならない。生きるための最後のギリギリのプライド故に弱さを認めることはできない。弱さの相互表明によって社会的なつながりをつくらうという命題は、このなけなしのプライドの放棄を要求するが故に、困難なのだ。

すなわち、つながりというソーシャル・キャピタルが最も必要な人間ほど、そのソーシャル・キャピタルを入手するための前提条件を欠いている。資本こそが資本を呼び寄せる当のものだ、という資本主義の極めて本質的な原理が、ここでも発動している。

自分自身からの排除と、他者とのつながりからの排除、この二つが負のスパイラルを形成する中で、人は言葉を失ってしまうのだろう。平たく言ってしまうと、自分自身の人生が大切に思えず未来がどうでもよくなってしまったとき、そしてそんな自分から他者が離れて孤立していくときに、人間は声など挙げられるだろうか。

## 8. おわりに

吉野源三郎の名著『君たちはどう生きるか』において、コペル君は叔父さんから、人間がとかく自分を中心としてものごとを考えたり、判断してしまうこと、それに対して、自分を離れて正しく判断することの大切さを学んだ。一般に本書の意義として、この「認識における天動説から地動説へのコペルニクス的転回」が強調されるのに対して、同書には逆の転回の大切さも示されていることは忘れられがちだ。「それにしても最後の鍵は、——コペル君、やっぱり君なのだ。君自身のほかにはないのだ。君自身が生きて見て、そこで感じたさまざまな思いをもとにして、はじめて、そういう偉い人たちの言葉の真実も理解することが出来るのだ。数学や科学を学ぶように、ただ書物を読んで、それだけで知るというわけには、決していかない……常に自分の体験から出発して正直に考えてゆけ」[吉野 1982 : 53f.]。

小論では、この天動説と地動説の断絶・すれ違い、両者を往還することの困難性とそこに発生する欺瞞、そしてコミュニケーションのすれ違い以前の問題としての、そもそもの当事者の語りの困難性について、断片的にはあるが記述してきた。

最近、私は、貧困問題について授業ですらすらと説明ができているとき、そこに何らかの欺瞞があるように感じる。「それで当の君自身はどう生きているのか」と問いかけてられているような気がする。語ることを抑圧された「もう一人の私」が、どこか奥底で、うめき声を上げているように感じる。その声と、どう付き合い続けていくのか、考え続けなければならない。

## 引用・参考文献

- 青砥恭 2009 『ドキュメント高校中退』ちくま新書  
 秋山茂幸 2008 「子どもを語るといこと——精神分析を手掛かりに」『幼児の教育』フレーベル館、2008年9月  
 秋山茂幸 2017 「教師の専門性に関する一考察——教師いじめ、教育リスク、学校のマクドナルド化」『教職課程センター紀要 第2号』大東文化大学教職課程センター  
 井上達夫、渡辺靖 2016 「トランプ”以後”の世界 これはトランプの勝利ではなく、クリントンの敗北である」『週刊読書人』2016年12月9日  
 内田良、島沢優子 2017 「日本のブラック部活動は「ゆとり化」すべきだ」(東洋経済 ONLINE)

<https://toyokeizai.net/articles/-/184640>

- 大内裕和 2016 『ブラックバイトに騙されるな!』集英社  
 大内裕和 2017 『奨学金が日本を滅ぼす』朝日新書  
 岡原功祐 2018 『Ibasyo——自傷する少女たちの“存在の証明”』工作舎  
 柄谷行人 1989 「掘立小屋での思考」(『意味という病』講談社)  
 汐見幸幸 2000 『「教育」からの脱皮』ひとなる書房  
 志水宏吉 2014 『「つながり格差」が学力格差を生む』亜紀書房  
 末富芳 2018 「(私の視点) 日大信頼回復のために 人権を守る体制づくり必須」『朝日新聞』2018年7月5日  
 西平直 1993 『エリクソンの人間学』東京大学出版会  
 堀尾輝久 1994 『日本の教育』東京大学出版会  
 本田由紀 2014 『社会を結びなおす』岩波書店  
 湯浅誠 2008 『反貧困』岩波書店  
 湯浅誠, 仁平典宏 2007 「若年ホームレス——「意欲の貧困」が提起する問い」(本田由紀編著『若者の労働と生活世界——彼らはどんな現実を生きているか』大月書店)  
 横湯園子 2002 『教育臨床心理学——愛・いやし・人権 そして回復』東京大学出版会  
 吉野源三郎 1982 『君たちはどう生きるか』岩波書店  
 鷺田清一 1999 『「聴く」ことの手帳——臨床哲学試論』TBSブリタニカ  
 G・C・スピヴァク 1998 『サバルタンは語るることができるか』上村忠男訳, みすず書房

- 1 貧困の問題に限らず、教育において「子どもを語る」ということの問題性、当事者性については、以前、精神分析の知見を手掛かりにしながら検討したことがある [秋山 2008]。くわえて、やや個人的なことを記しておく、筆者が、東京大学大学院人文社会系研究科 21世紀COE「死生学の構築」(2002-2006年)において研究員をしていた当時のことであるが、当事者性について筆者の蒙を啓してくれたのは、北海道浦河町にある精神障害等をかかえた当事者の地域活動拠点「べてるの家」の人たちとの出会いであった。記して感謝申し上げたい。
- 2 戦後教育学を代表する研究者である堀尾輝久は、東京大学の最終講義において、自身の研究の出発点に「自分自身に対する懐疑」や教育に対するニヒリズムが存在していたことを吐露している。この実存的・一人称的な問題を乗り越えるという個人的な動機が、堀尾の研究には通奏低音のように流れている。堀尾は、この自分自身への問いについては、「自分を解剖して人前にさらす」という「しんどいこと」になるので、そのまますぐには研究対象にしようとは思わなかったと述べて

ている。しかし、堀尾の個人的な研究史が、教育権を中心に歴史社会的なものから、発達教育学を中心に「総合的人間学としての教育学」へと移行したことは、既述したような実存的な問題が背景にあったと解釈してもよいだろう [堀尾 1994: 396]。ちなみに、思想家の柄谷行人は、この実存問題について「掘立小屋での思考」なる言い方で捉えていた。「マルクス主義と実存主義、あるいはそれに類する問題の立て方がある。私が理解できないのはその種の議論であって、いつもこんなふうを考えていた。なぜひとはマルクスという“実存”そのものをみようとししないのだろうか。ヘーゲルは大きな建物をたてて自分はその脇の掘立小屋に住んでいるのだ、とキルケゴールは言っている。しかし、ヘーゲルだけではない。どんな人間も実は掘立小屋に住んでいるのである。そして、そういう場所でものを考え生活をしているのだ、と私は思っている」 [柄谷 1989: 293]。また、教育の臨床的な研究については、京都大学で「臨床教育学」が開講してから三十年が経とうとする現在、既に教育界には様々な著作が存在するが、筆者個人は横湯園子氏と西平直氏から多大な指示をいただいた。横湯の思索は常に、研究者としての「私」、臨床家としての「私」、一人の人間としての「私」に引き裂かれながら、思い悩み葛藤し続けた足跡によって形成されている [横湯 2002]。西平はその博士論文『エリクソンの人間学』のなかで、臨床科学の方法論について、参与性、主観性、相対性といった概念を軸に極めて本質的・原理的な検討を行っている [西平 1993]。

- 3 経済界において、このような課題を察知し、高等教育における二極分化した教育の必要性を提起して、2014年に話題となったのが富山和彦氏のG型・L型大学の構想であろう。日本の大学をグローバル時代に通用するような高度人材養成をする大学と職業訓練校に二分するこの構想は、教育界に様々な議論を巻き起こした。ここではその賛否は問わないが、現在、そのような議論が生まれる土壌が日本に存在することは疑いえない事実である。
- 4 ちなみに、教育社会学者の本田由紀は、高度成長期に形成された、仕事、家族、教育の三つの領域の相互的な後押しによって成立した社会を「戦後日本型循環モデル」と呼んでいる。そして、1990年代のバブル崩壊以降、このモデルが破綻し、三つのシステムすべてにおいて劣化が始まったとされる [本田 2014]。すなわちそれは、“普通の”会社員、“普通の”家族、“普通の”学校や子どもといったような、普通や一般の崩壊を意味している。例えば、近年、セクシャル・マイノリティーの人々に教育界でも光が当たりつつあることには、普通や一般が崩壊したことで、それまで隠蔽・排除されてきた当事者の語りが浮上してきたという背景があるだろう。
- 5 以上の文脈で思い起こされるのは、2018年に話題になった日本大学アメフト部の悪質タックル問題である。2018年7月5日付の朝日新聞紙上において、日本大学で教鞭をとっておられる末富芳氏が、教育行政や教育法規を専門とする立場で、小中高における暴力被害などを教えてきた者として、アメフト部員を指導学生として持ちながらも、これまでこの問題に踏み込めなかったことを専門家として恥じた上で自己反省し、今後の改善・防止策について提言されていたことが印象深い [末富芳 2018]。
- 6 さらに井上は次のように指摘している。「ニューディールの後、アメリカのリベラルの中で平等観の焦点が、勤労大衆の社会

経済的な平等から、被差別集団の平等、つまり人種の少数者の平等、あるいはジェンダーの平等、LGBTのような性的指向性における少数者の平等の方に移っていった。階層間の平等、伝統的な経済的格差の平等の問題が、後者の問題の脇に追いやられるようになった。たとえば女性や黒人のための

affirmative action(積極的差別是正措置)で優遇されるのは、女性一般、黒人一般ではなく、親が一流大学や専門職に子を進ませるための教育投資や家庭環境を提供できるような、これらの集団の中でも上層の人たちです。下層の人々は、その恩恵と縁がないどころか、「逆差別的優遇をしてやってるのにうだつが上がらないのは、お前らが無能怠慢だからだ」という烙印付けを強化されてしまう。(中略)ポストニューディールのリベラルたちはジェンダーの平等、人種の平等を推し進めたけれど、その中に存在している階層格差を見て見ぬ振りをした。さらに、被差別集団の中のエリートの権利を拡張する反面で、そのコストを下層の人たちに負わせてしまった」[井上達夫, 渡辺靖 2016]。

- 7 ガヤトリ・C・スピヴァクは、その著作『サバルタンは語る事ができるか』の中で、フーコーやドゥルーズの西洋主体批判、主体の掘り崩しこそが、実は一つの主体を立ち上げる作業なのだとか喝破していた。いわく、「二人とも、イデオロギーの問題およびかれら自身が知的ならびに経済的な生産活動の歴史のなかに巻きこまれているということにまつわる問題については、これを一貫して無視している」(傍点:引用者)[スピヴァク 1998: 4]。すなわち彼らの知的活動は、経済的な利害と共犯関係にあるのだ、と。
- 8 そもそも「貧困の外部にいる者が、貧困の内部を生活している者を理解できるのか」という原理的な他者理解の可能性と不可能性について考えるとき、それは「想像力や共感が必要だ」といったような紋切り型の言葉で済ませられるほど生易しい問題ではないだろう。小論の本文中ではシモーヌ・ヴェイユの例を出したが、断絶している世界を越境して人間を知ろうというとき、人はその他者の世界に巻きこまれざるをえない。異なる世界の人間と共に生きなければ、その人は見えてこない。そのとき観察者である自分自身の安定性が揺さぶられ、何らかの変容を経験せざるを得ない。他方で見るという行為は対象と距離をとらなければ原理的に不可能な行為でもある。この接近しながらも距離をとるという逆説的な状況に自分自身を投入することでしか、生きた人間は見えてこない。少しばかり話が広がりすぎるかもしれないが、近年、このことを最も如実に感じさせてくれたのが、写真家の岡原功祐氏による『Ibasyo』という作品であった。自傷する少女たちに寄り添って編まれた本書には、取材者と取材対象という枠組みを越えた関係性の中で、互いが戸惑い自分自身を見つめ直し、変容・成長していく様子が描かれている[岡原 2018]。
- 9 「臨時的教員 小中4万人以上 学級増で年々増加」(『毎日フォーラム』毎日新聞社、2018年1月号)。本記事では、臨時的教員が増えた背景には、2004年度に導入された総額裁量制と、2006年度からの義務教育費国庫負担金の2分の1から3分の1への削減が要因としてあるという見方を紹介している。すなわち、正規教員1人の代わりに給与の安い非常勤や臨時的教員を2~3人配置するいわゆる「定数崩し」が広がったとされる。また、臨時的教員は何年働いても給料が変わらず、おおむね正規教員の5~8割程度である。
- 10「小中教員 非正規4万人 給与5~8割 担任や部活指導」『読

売新聞』2017年6月27日。

- 11「非正規教員 担任も部活も」『朝日新聞』2017年6月5日。
- 12「公務員 急増する非正規 教員、保育、福祉…」『読売新聞』2017年12月13日。
- 13スピヴァクは、第一世界における人文諸科学において研究主体が自らを透明な主体に偽装しながらも、善意に満ちたやり方で、第三世界の他者を領有し、自分たち主体の地位を固めるのに都合のよい形で書き込み直そうとしていることを繰り返し指摘していた[スピヴァク 1998]。今日グローバル化が進行するなかで、貧困は国境を越えて第一世界にも遍在化するようになった。したがって現在問題となっているのは、国境内部で構築され周縁化された他者であり、「労働の分断 (division of labor)」であり、サバルタンの遍在化である。
- 14教師の仕事を分業・外注することによる、教育のサプリメント化、学校のマクドナルド化の進行については、前号の拙論を参照していただきたい[秋山 2017]。
- 15青砥恭が『ドキュメント高校中退』の中で指摘しているが、いわゆる底辺校、教育困難校において、生徒が中退していく背景には、生徒自ら辞めるように教師によって仕向けられたり、追い込まれたりすることが多々ある。「〇〇人やめさせて、ずいぶん楽になりました。という言葉が底辺校では日常的に聞かれる」[青砥 2009: 178]。